



TITLE:

アダマール2デザインの分類 (配置の組合せ的構造)

AUTHOR(S):

伊藤, 昇

CITATION:

伊藤, 昇. アダマール2デザインの分類 (配置の組合せ的構造). 数理解析研究所講究録 1981, 429: 9-17

ISSUE DATE:

1981-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/102658>

RIGHT:

アダマール 2 デザインの分類

イリノイ大学シカゴサークル 伊藤 昇

定義 $P = \{1, \dots, v\}$, また $B = \{\alpha_1, \dots, \alpha_v\}$ を P の k -部分集合の族とする. つぎの 2 条件が満足されるとき $D = (P, B)$ は対称 2- (v, k, λ) デザインと呼ばれる:

- (1) $\forall a \in P$ についてきっかり k 個の α_i が a を含む.
- (2) $\forall a, b \in P, a \neq b$ についてきっかり λ 個の α_i が a, b を含む.

P, B の元をそれぞれ D の点, ブロックと呼ぶ. $v = 4\lambda + 3, k = 2\lambda + 1$ のとき $D = D(\lambda)$ はアダマール 2 デザインと呼ばれる.

定義 対称 2 デザイン $D_1 = (P, B_1), D_2 = (P, B_2)$ は B_1 を B_2 にうつす置換を誘導する P 上の置換 σ が存在するとき同型という. $B = B_1 = B_2$ のとき σ は D の自己同型と呼ばれ, その全体が D の自己同型群 $G(D)$ を作る. $d(\lambda)$ を $D(\lambda)$ の同型類の個数を示す.

文献 [1] から $d(5) = 1102$ が示される. その過程で出て来たいくつかの事実, 問題について話したい. 分類のはじ

めの目安はつぎの概念である。

定義 $K(\alpha) = \#\{\beta, \gamma; \beta \neq \gamma; \alpha \cap \beta = \alpha \cap \gamma, \alpha, \beta, \gamma \in B\}$ で定義される B 上の関数を D の K 関数と呼ぶ。 K 関数が異なる D_1, D_2 は同型でない。 $L(a) = \#\{b, c; b \neq c; a, b, c \text{ を含む } \lambda \text{ 個の } \Gamma \text{ ブロックが存在する}, a, b, c \in P\}$ で定義される P 上の関数を D の L 関数と呼ぶ。 L 関数が異なる D_1, D_2 は同型でない。 L 関数は双対 (点, Γ ブロックを交換して作られるデザイン) の K 関数である。

K 関数の効力についてはつぎのことを云えよう。 λ 偶数のときは無効である: $\lambda \equiv 3 \pmod{4}$ のときは複雑であり, 組織的研究が待たれる: $\lambda \equiv 1 \pmod{4}$ のときは有効に使用される。

命題 1. λ が偶数ならば K 関数は零関数である。

証明. $\Delta = \alpha \cap \beta = \alpha \cap \gamma$ とすると $P = \alpha \cup \beta \cup \gamma$. それで $\delta \neq \alpha, \beta, \gamma$ について $x = |\Delta \cap \delta|$, $y = |(\alpha - \Delta) \cap \delta|$ とおくと, $x + y = \lambda$ (D の対称 2 デザインだから, 任意二つの Γ ブロックの共通部分は λ -部分集合), $x + 3y = 2\lambda + 1$. したがって $2y = \lambda + 1$, $2x = \lambda - 1$ である。

命題 2. K 関数の値がすべて $2\lambda + 1$ ならば, D は $GF(2)$

上の射影幾何 (ブロックは超平面, $\lambda = 2^n - 1$) と同型である。

証明. 双対で見る. 2 点を含むブロック全部の共通部分をその 2 点で決定されるラインと呼ぶ. 仮定は任意のラインが 3 点からできていることを云っている. したがってライン $\{a, b, c\}$ と交わるブロックの個数を数えると, a, b または c とだけ交わるのが $\lambda + 1$ 個ずつ, ラインを含むのが λ 個あるので, 任意のブロックと交わる. Dembowski-Wagner の定理 [2, p. 67] によるとそれですみ.

注意. 以上二つの事実は [3] にある. 後者は Norman の定理である.

命題 3. $P = GF(q)$, $q \equiv 3 \pmod{4}$, $R = (GF(q)^{\times})^2$, $B = \{R + a, a \in GF(q)\}$ として得られるアダマール 2 重ゲインを平方剰余型と云う. 平方剰余型はもつとも興味のあるアダマール 2 重ゲインである. さて平方剰余型では K 関数は零関数である.

証明. [4] による. $GF(q)$ の平方指標 $\chi: \chi(a)$ は $a = 0$, $a \in R$, $0 \neq a \notin R$ にしたがって $0, 1, -1$ である; を使う. この手法は平方剰余型のもつ精密な性質をしらべるのにも有用であると思う. a, b, c を $GF(q)$ の異なる 3 元とする. $4 | R + a \cap R + b | = \sum_{x \in R} (1 + \chi(x + a)) \cdot$

$(1 + \chi(x+a)) + \varepsilon_2, 8 | R+a \cap R+b \cap R+c | =$
 $\sum_{x \in R} (1 + \chi(x+a)) (1 + \chi(x+b)) (1 + \chi(x+c))$
 $+ \varepsilon_3$, ここで $\varepsilon_2, \varepsilon_3$ は $x+a, x+b$ または $x+c$ が
 0 になるときの調整項で, a, b または a, b, c に依存す
 る. ここで $\sum_{x \in R} \chi(x+a)\chi(x+b) = -1$ は見易い. 大切な
 のは Weil 評価 $\left| \sum_{x \in R} \chi(x+a)\chi(x+b)\chi(x+c) \right| \leq 2\sqrt{q}$
 [5, p.43] である. それで $4 | R+a \cap R+b | \geq q-5$,
 $8 | R+a \cap R+b \cap R+c | \leq q-3 + 2\sqrt{q}$ が得られ
 る. $q \geq 17$ のときは前者の値が大きい. $q=7, 11$ のと
 きは直接確かめる.

命題 4. $\lambda \equiv 1 \pmod{4}$ とする. $K(\alpha) \geq 3$ となる α の
 個数は高々 1 つで, 1 のときは $\forall \beta \neq \alpha$ について $K(\beta) \leq 1$
 . $\lambda=5$ のときは上の 3 は 2 と出来るが, $\lambda > 5$ のときは未
 知である.

証明. 1° $\Gamma = \alpha \cap \beta = \alpha \cap \gamma$ (α, β, γ は相異), Δ
 $= \delta \cap \varepsilon = \delta \cap \xi$ (δ, ε, ξ は相異) とすると, $\{\alpha, \beta$
 $, \gamma\} \cap \{\delta, \varepsilon, \xi\} \neq \emptyset$ である. 否定して仮定すると,
 $\Delta = (\alpha \cap \Delta - \Gamma \cap \Delta) \oplus (\beta \cap \Delta - \Gamma \cap \Delta) \oplus (\gamma \cap \Delta -$
 $\Gamma \cap \Delta) \oplus (\Gamma \cap \Delta)$ で, $|\alpha \cap \Delta| = |\beta \cap \Delta| = |\gamma \cap$
 $\Delta| = \frac{\lambda-1}{2}$ は命題 1 の証明でわかっているのだから, $\lambda=3$ (
 $\frac{\lambda-1}{2} - |\Gamma \cap \Delta|) + |\Gamma \cap \Delta|$ から $|\Gamma \cap \Delta| = \frac{\lambda-3}{4}$.

2° $\alpha \cap \beta = \alpha \cap \gamma$, $K(\alpha) > 1$, $K(\beta) > 1$ とする. $\alpha \cap \delta = \alpha \cap \varepsilon$, $\beta \cap \xi = \beta \cap \zeta$, $\{\beta, \gamma\} \cap \{\delta, \varepsilon\} = \emptyset$, $\{\alpha, \gamma\} \cap \{\xi, \zeta\} = \emptyset$ といふ $\delta, \varepsilon, \xi, \zeta$ が存在する. 1° により $\zeta = \delta$ と仮定出来る. このとき $\gamma \cap \varepsilon = \gamma \cap \xi$ とする. したがって $K(\gamma) > 1$ である. まず 1° と仮定して $\varepsilon \cap \xi = (\alpha \cap \varepsilon \cap \xi - \Gamma \cap \varepsilon \cap \xi) \oplus (\beta \cap \varepsilon \cap \xi - \Gamma \cap \varepsilon \cap \xi) \oplus (\gamma \cap \varepsilon \cap \xi - \Gamma \cap \varepsilon \cap \xi) \oplus \Gamma \cap \varepsilon \cap \xi$, $\Gamma = \alpha \cap \beta$ である. $x = |\gamma \cap \varepsilon \cap \xi|$, $y = |\Gamma \cap \varepsilon \cap \xi|$ とおく. 1° と仮定してすると $x = 2y + 1$ を得る. つぎに \mathbb{P} の $\alpha, \beta, \gamma, \delta, \varepsilon, \xi$ に含^除原理 [6, p. 17] を使えば $x = y + \frac{\lambda+1}{2}$, ところで $x = \lambda$, $y = \frac{\lambda-1}{2}$ を得る.

3° 2° によりと相異なる 67 "ボックス" で, $\alpha_1 \cap \alpha_2 = \alpha_1 \cap \alpha_3$, $\alpha_1 \cap \alpha_4 = \alpha_1 \cap \alpha_5$, $\alpha_2 \cap \alpha_4 = \alpha_2 \cap \alpha_6$, $\alpha_3 \cap \alpha_5 = \alpha_3 \cap \alpha_6$ を満足するものが存在する. $K(\alpha_i) \geq 3$ とすると, さらに $\alpha_1 \cap \alpha_6 = \alpha_1 \cap \alpha_7$, したがって $\alpha_2 \cap \alpha_5 = \alpha_2 \cap \alpha_7$, $\alpha_3 \cap \alpha_4 = \alpha_3 \cap \alpha_7$ も成立つこととされる. さらに α_i ($1 \leq i \leq 7$) のどの 4 つの共通部分も一致することとされるので, これを Γ とおく. $\beta \neq \alpha_i$ ($1 \leq i \leq 7$) をとり, $x_1 = |\beta \cap (\alpha_1 \cap \alpha_2 \cap \alpha_3 - \Gamma)|$, $x_2 = |\beta \cap \Gamma|$, $x_3 = |\beta \cap (\alpha_1 \cap \alpha_4 \cap \alpha_5 -$

$|\Gamma|$, $x_4 = |\beta \cap (\alpha_1 \cap \alpha_6 \cap \alpha_7 - \Gamma)|$, $x_5 = |\beta \cap (\alpha_2 \cap \alpha_4 \cap \alpha_6 - \Gamma)|$, $x_6 = |\beta \cap (\alpha_2 \cap \alpha_5 \cap \alpha_7 - \Gamma)|$, $x_7 = |\beta \cap (\alpha_3 \cap \alpha_4 \cap \alpha_7 - \Gamma)|$, $x_8 = |\beta \cap (\alpha_3 \cap \alpha_5 \cap \alpha_6 - \Gamma)|$ とおく. $x_1 + x_2 + x_3 + x_4 = x_1 + x_2 + x_5 + x_6 = x_1 + x_2 + x_7 + x_8 = \lambda$, $\sum_{i=1}^8 x_i = 2\lambda + 1$, $x_1 + x_2 = \frac{\lambda-1}{2}$ より, $x_2 + x_3 + x_5 + x_7 = x_2 + x_3 + x_6 + x_8 = x_2 + x_4 + x_5 + x_8 = x_2 + x_4 + x_6 + x_7 = \lambda$. ところで $x_3 + x_4 = x_5 + x_6 = x_7 + x_8$ とおくと, $x_1 + x_2 + a = \lambda$, $x_1 + x_2 + 3a = 2\lambda + 1$, $2a = \lambda + 1$. ところで $4x_2 + 6a = 4\lambda$, $4x_2 = \lambda - 3$ とおける.

$\bar{\Gamma} = 7$. 1102個の2-(23, 11, 5)設計について, $k = \max_{\alpha \in B} K(\alpha)$ とおく. k の値による細分は次の通りである: $k = 11$ のもの20, $k = 5$ のもの108, $k = 3$ のもの352, $k = 2$ のもの510, $k = 1$ のもの108, $k = 0$ のもの4. 他方, $g = |G(D)|$ とおく. g の値による細分は次の通りである. $g = 660$ のもの1, $g = 253$ のもの1, $g = 60$ のもの2, $g = 55$ のもの2, $g = 12$ のもの4, $g = 11$ のもの1, $g = 6$ のもの14, $g = 5$ のもの10, $g = 4$ のもの17, $g = 3$ のもの35, $g = 2$ のもの108, $g = 1$ のもの907.

注意 このデータだけからみると、自明でない自己同型を持たないものの数が普通であると云えるが、一般の対称2デザインでも本当であるかどうか追求に値すると思う。

つぎの概念はアダマール2デザインに特有のものである。

定義 $D = (P, B)$ をアダマール2デザインとする。 B から P への双射 T は (1) $T(\alpha) \neq \alpha$, $\alpha \in B$, (2) $T(\alpha) \in \beta \iff T(\beta) \in \alpha$, $\alpha, \beta \in B$, $\alpha \neq \beta$ を満足するときトーナメントと呼ばれる。

命題5. 平方剰余型のアダマール2デザインでは, $T(R + a) = a$ とおくと, T はトーナメントになる。

証明. $q \equiv 3 \pmod{4}$ なので, $\chi(-1) = -1$. それから条件(2)が出る。

注意. $q \geq 19$ のとき, 上の T が唯一のトーナメントのようには思われる。

命題6. アダマール2デザイン $D = (P, B)$ がつぎの2条件を満足するとする: (1) 相異なる3つのブロック α, β, γ で $\alpha \cap \beta = \alpha \cap \gamma$ なるものがある ($k(\alpha) \geq 1$). (2) 任意3点について, それらを含むブロックが存在する. そのとき D はトーナメントを持たない。

証明. $P = \alpha \cup \beta \cup \gamma$ なので, $T(\alpha), T(\beta), T(\gamma)$ を含むブロックを δ とすると, $T(\delta)$ は α, β, γ のどれかに

展することになる。

したがって、

命題7. $GF(2)$ 上の射影幾何は、その次元が4以上ならばトーナメントを持たない。

注意. トーナメントについては、つぎの問題がとくに指摘される。平す剰余型では $x \rightarrow x + a$, $a \in GF(q)$ が自己同型なので、自己同型群は P 上可移である。この逆、すまは P 上可移な自己同型群を持つアダマール2デザインがトーナメントを持てば、平す剰余型であるか？

ともかく分類ははじめられたばかりで、たとえば λ 偶数のときは、自己同型群と λ トーナメントとを位しぬ、その規準も知られていない。興味を持って頂ける人の出現を期待したい。

文献

1. Ito-Leon-Longyear, Classification of 3-(24, 12, 5) designs and 24-dimensional Hadamard matrices, JCTA (1981)
2. Dembowski, Finite geometries, Springer 1968.
3. Kimberley, On the construction of certain Hadamard designs, Math.Z. 119 (1971), 41-59.

4. Evans, Note on intersections of translates of powers in finite fields, Hokkaido Math. J. 9 (1980), 135 - 137.

5. Schmidt, Equations over finite fields, Springer 1976.

6. Ryser, Combinatorial mathematics, MAA 1963.